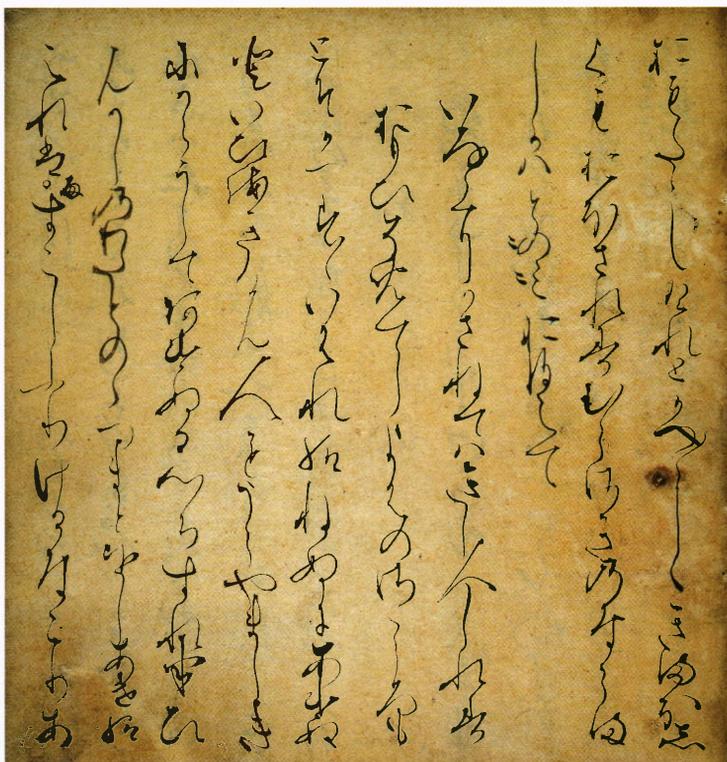


やまとの名品

天理図書館



狭さ衣ころも(重要美術品)

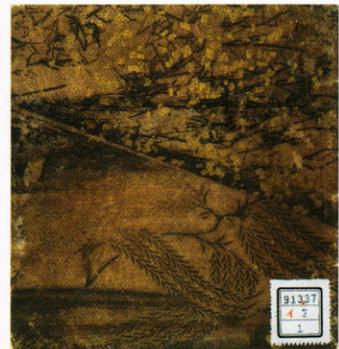
4卷4冊 鎌倉末期写
縦16cm 横15.5cm

平安時代を代表する物語である『源氏物語』。十一世紀初め成立の「源氏」以降、多くの物語が書かれた。『夜半の寢覚』『浜松中納言物語』、『とりかへばや物語』（改作前）、短編の『堤中納言物語』など、いずれも「源氏」の影響を強く受けた作品であった。

平安時代後期、十一世紀後半頃成立とされる『狭衣物語』も例外ではない。才芸・容貌共に優れつつも、叶わぬ恋に悩む男主人公を中心に展開する物語は、主人公「狭衣」が『源氏物語』の薫君的性格であるなど、登場人物や事件に「源氏」と似通った部分が見え隠れする。

ただ、単に模倣で終わるだけでなく、「夢」や「神託」などの手法を用いるなど、平安後期物語の特徴となるものも現れている。また、「狭衣」以降の平安時代末期や鎌倉時代成立の擬古物語には、「小夜衣」「苔の衣」「石清水物語」「我身にたどる姫君」「恋路ゆかしき大将」など、「狭衣」に影響を受けたものも多く見受けられており、鎌倉極初期の文芸評論集である『無名草子』は、「源氏」に次いで高い評価を与えている。

六条斎院祿子内親王に仕えた女房、宣旨（一一〇九二）の作とされる「狭衣」。その高評価から、現存する伝本は、江戸時代



のものを含めて多いが、本文の異同も大きく、複雑さは平安時代物語の筆頭ともいわれる。天理図書館蔵本の中でも金銀泥の下絵に箔を散らした美しい表紙を持つ本書は、一部を室町時代の写にて補うが、数少ない鎌倉時代の写本で、「狭衣」研究の重要なテキストの一つである。

（天理図書館 西口尚子）